

2017年(平成29年)

2月10日

金曜日



最先端医療の研究に没頭

太田秀樹 ⑤

自治医大の決まりとして、卒業生はみなへき地に赴任していくため大学病院は慢性的な人手不足だった。だから、僕のようなレジデント(研修医)は、他の大学病院の研修医と比べて何倍もの患者とかかわることができた。おかげで手術の腕もあが

り、臨床の力も強くなった。人工関節に入れ替える手術によつて車いすの生活から歩けるまでに回復する症例を経験したりすると、麻酔科時代とはまた異なるやりがいを感じた。こういった症例を通して最先端医療にかかわりたいとの思いは、医

学研究への興味へと変わっていった。すでに30歳を超えていたが、大学院へ進学し脊髄から脳波のような電気信号を測定する研究に没頭した。神経の作用は微弱な電流によつて生じるので、脊髄の病気を電気信号で診断しようと試みたのである。当時は高度先進医療としてマスコミに紹介されたこともあったが、博士論文をまとめるのに5年もかかってしまった。要す

るに留年したのである。しかし、大学院修了後は助手、講師、医局長と順調に出世。大学病院ならではの治療に大きな喜びと満足もあった。一方で元気に退院したのに、しばらくすると寝たきりになって戻ってくる患者がいた。骨折すると大変だと寝かされたまま、いつのまにか寝たきりとなってしまったのだ。医者は退院後の暮らしまで知ることができない。当然であるが何かもやもやしたものを拭き去ることができない。「寝たきり老人」のいる国はない国」という本と出会ったのはそんな時だった。(次回17日)

とちぎの風

人生支える在宅医療



おおた・ひでき 1953年、奈良市生まれ。自治医大大学院修了。92年「おやま城北クリニック」開業。現在は医療法人アスムス理事長として在宅医療を推進。

おおた・ひでき 1953年、奈良市生まれ。自治医大大学院修了。92年「おやま城北クリニック」開業。現在は医療法人アスムス理事長として在宅医療を推進。